

－ " Boumite " の 提 案 －

志 岐 常 正 （京大理・地鉦）

いわゆるタービダイトが，" Bouma のモデル" と呼ばれている特徴的な " 単層内部堆積構造 " を持つことは，最近では広く知られている。タービダイトの単層内部堆積構造については，他にもその規則性について述べた研究があるが，Bouma (1962) の提唱したものが，もっとも一般性をもち，model cycle として認められている。

一方，逆に " Bouma のモデル " に対比される堆積構造をもつ地層がすべてタービダイト，すなわち，混濁流からの堆積物であるといえるであろうか。この点については，有田 (1971) も紹介しているように，最近多くの疑念や異論が提出されている。(Kingma 1960 ; Hubert

1967 ; Shepard et al 1969, など)

しかしながら，筆者の考えによれば，いわゆるタービダイトの内部堆積構造の model cycle として Bouma のモデルが認められるということは事実として重視されなければならないであろう。そのことは，いわゆるタービダイトの形成機構が果して混濁流であるか否かということとは直接関係がない。いいかえれば，成因がどうであれ，ともかく Bouma のモデルに対比される内部堆積構造をもつ地層が，世界各地の各時代の地層に，きわめて多数見出されるということが問題なのである。この問題は解かれなければならない。

筆者はこれまで，上のような観点から，いわゆ

るタービダイトのもつ諸性質や形成機構を検討してきた。その際、とりあえず、Bouma のモデルに対比される特徴、その他、いわゆるタービダイトに共通的な特徴や産状をもつ地層という意味で「タービダイト」という言葉を使って来た。この言葉は、その語を作った語源やいきさつからしても、筆者の意図とは無関係にいわゆる混濁流からの堆積物であることを意味すると読者に受取られても仕方がない。しかし、実際のところ、混濁流 (turbidity current) とは何か。そのようなものが実在するか否か。実在するとすればどのようなものであるか、などということについての筆者の見解は、Kuenen あるいは、その他の欧米の誰かれと必ずしも同じというわけでもないのである。

とにかく「タービダイト」と呼ばれている地層がある以上、そのような地層を堆積する機構があるはずである。筆者と同様に、このような考えを抱きつつ、とりあえず「タービダイト」という言葉を使っている人も多いことと思う。それで、このような不便、不合理をなくし、不必要な誤解や混乱を少なくするために、当分、別の言葉を使うことを考えた方がよいのではないだろうか。

そこで、筆者は、上記のような地層、もう一度正確を期して書き直せば、

「Bouma のモデルに対比されるような単層内部構

造、その他、従来いわゆるタービダイトに特徴的といわれたような構造や産状を示す地層」

を、当分、いわゆる混濁流の正体や、タービダイトの形成機構が明らかになるまで、「Boumite」と呼ぶことを提案したい。

この名は、いうまでもなく、「Bouma のモデルから発想したものである。そのことにこだわるわけではなく、もっとよい言葉があればそれでもよい。とにかく、直接成因の意味を含まない言葉ならよい。「Boumite」の難点としては、日本人にとって Bornite と音が似ていることである。しかし、Bouma という名前の発音は、岡田さんの教示によれば、「ボーマ」や「ブーマ」よりもむしろ「バウマ」に近いらしい。

生きている人の人名という点にも問題があるかも知れない。それならば、Bouma のモデルの模式地となった地名をとって、Peira - Cavite というのはどうだろうか。研究会会員の皆さんの検討をお願いしたい。

なお、上記の定義の「Bouma のモデルに対比される」とは、Bouma のモデルの a 部から e 部までに対応する部分が全部そろっていることを意味するわけではない。この点は、堆積学研究者の方がたには言うまでもないが、念のためつけ加えておく。